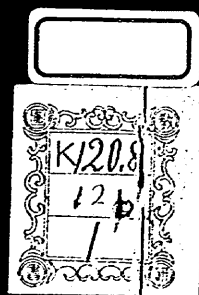
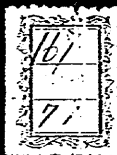


尋常小學讀本



K120.8

12b

1

小學校教科用書

尋常小學讀本

明治二十年五月文部省編輯局

尋常小學讀本

緒言

此書ハ、曩ニ本局ニ於テ編輯セル讀書入門ニ次キ、尋常小學校第一年ノ半ヨリ、第四年ノ末ニ至ルノ間、兒童ニ讀書ヲ教フルノ用ニ供センガ爲メ、編纂セルモノニシテ、全部通ジテ七冊トス。

一此書ニ選擇セル材料ハ、兒童ノ心情ニ恰



尋常小學讀本 第一卷 第一冊

當シテ、解シ易ク學ビ易ク、且快味ヲ有スルモノニシテ、知ラズ識ラズ、其品性ヲ涵養陶造スルニ適ス可キモノヲ取レリ。

一 此書ノ文體ハ、最初ニ談話體ヲ用ヒ、漸次に進ミテ文章體ニ移リ、以テ目下普通ノ漢字交リ文ヲ了解スルニ至ラシム。漢字ハ、其用最モ廣キ者ノ中ニ就テ、大凡二千字ヲ選ビテ、之ヲ全部中ニ編入シ、成ル可キタケ、簡畫ノ者ヨリ、漸漸繁畫ノモノニ及ボセリ。

一 此書第一卷ハ、兒童ノ遊戲、或ハ昔話等ノ如キ、意義ノ解シ易ク、趣味ノ覺リ易キモノヲ選ビ、成ルベキタケ、一地方ノ方言ト、鄙野ニ涉レルモノトヲ除キ、談話體ノ言辭ヲ以テ之ヲ記シタリ。又漢字ハ、成ルベキタケ、字畫ノ少クシテ、其用ノ普通ナルモノヲ用ヒ、且其記憶ヲ牢クセンガタメ、二、前課ニ用ヒタル漢字ハ、必ズ後課ニ複出シテ、其練習ノ用ニ供シタリ。

一 第二卷、第三卷ニ至リテハ、簡短平易ナル

文章體ヲ以テ之ヲ記シ、漢字モ亦漸ク其數ヲ増加スト雖、其文字ノ練習ハ、稍緊要ナラザルガ故ニ、必ズシモ之ヲ後課ニ複出セズ、唯記述ノ事柄ヲ選ビ、遊戯ノ話ニ雜フルニ、諺考ヘ物庶物ノ話、其他養氣ニ資ス可キ古人ノ行實等ヲ以テシ、第四卷、第五卷ニ至リテハ、文章モ稍長キ者ヲ載セ、地理歴史ノ事實ヲ加ヘ、第六卷、第七卷ニ至リテハ、學術上ノ事項ヨリ、農工商ノ職業ニ關スル事項ヲモ加ヘタリ。但毎

卷皆新ニ教フル漢字ハ、每課ノ末ニ摘書シテ教授ノ便ニ供セリ。

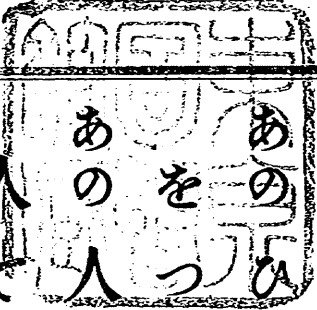
一此書ハ、本局ニ於テ編纂シ、本省特ニ設クル所ノ審査委員ノ審査ニ附シ、文部大臣ノ裁定ヲ經テ、成レルモノナリ。

明治二十年

文部省編輯局

尋常小學讀本卷之一

第一課



あのひとは、いぬ
 をつれてきます。
 あの人は、大きな
 人では、ありま
 せぬか。
 あの犬は、わたくし



の犬より、ちひさい犬であります。

あの小さい犬は、この大きな犬にまけませう。

人 大 犬 小

第二課

あの木の上に、大きなとりがゐます。あれは、からすて

あります。アレ、とらんなされ、下のには、小さいのがゐます。からすは、いたづらなとりであります。石をなげてもやませうか。



むかふに人がをるから、犬に
ねはせませう。

木 上 下 石

第三課

こゝに、大きなうめの木が
あります。ふたりの女の子は、
その下の石の上にて、ほん
を見てゐました。うめが一つ、

本の上にならまいた。

ふたりは、れどろいて、上を見

たれば、をこの

子が、木に

のほりて

ゐました。

うしてうめ

は、この子が、とりうこをうて、



れどしたのてあります。

女子見本

第四課

は、さま、此本の糸をとらん
 なされ。ととりた女のうばに
 きんときが、まさかりを持ちちて、
 くまにのりてゐます。
 きんときは、つよさうな子で

あります。どのくらゐ力が
 あります。か。
 わたくしは、刀
 を持ちちて、うち
 のくらにのり
 ちてきんとき
 と、力くらゐを
 してみたいと



れもひます。

此 持 力 刀

第五課

こゝに、六人の子どもがゐます。
太郎は、刀を持ちちて、大いやう
となり、三郎 四郎 五郎は、
ほうをかついて、兵たいと
なり、まいた。 此 兵たいは、よく

ろろうてならんでゐます。

らつばを吹く

のは、力三て

たいことをうつ

のは、二郎で

あります。

此 兵たいは、みな

つよくて、よく 大いやうのがうい



れいどほりにすゝみます。

太郎 兵 吹

第六課

ますぐにたてよ、正しくむけよ、
左を見るなよ、右をもみる
なよ。

かいらをまげず、むねをばいたし、
ちかよりすぎず、ほどよくならべ。

ゆたんをするな、がうれいまもれ、
足なみろろへ、いつかにあゆめ。

正 左 右 足

第七課

太郎は、いま犬にむかうて、手
をうちながら、

「ますぐに立てよ、正しく向け
よ、左を見るなよ、右をも

見るなよと うたうて おます。

ろの あひだ、犬は

あと足で 立ちて

おます。 太郎が

くちぶねを 吹

きます と、 犬

は、 兵たいの

やうに、よくろのがうれいを



きゝます。

犬は、今に なにか、ほろびを

もらうで ありませう。

手 立 向 今

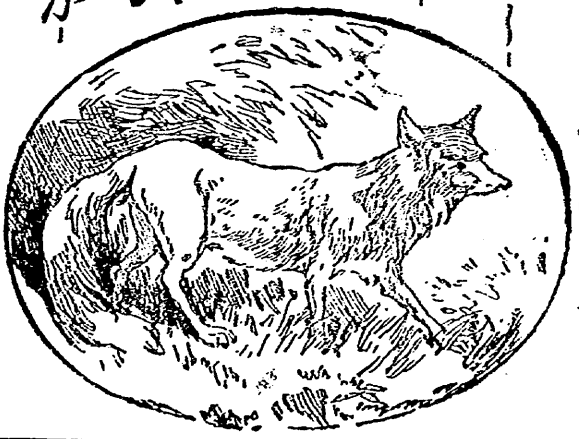
第八課

あるひ、小太郎は、父に向ひ

「ど、さま、わたくしは、今きつね

を見て きまゝした。ろの 狐は、

ちやうどと成りのあかのやう
 て、尾は太く、か
 らはちひさく、口
 さきとみ、とが
 とがりて、あました。
 父は、小太郎に、「狐
 は、まことにあつが、
 ーこい、けだもので、
 たびー」



かひどりをぬすむものな」と
 をへました。

小太郎は、「と、さま、こんど狐
 がきたならば、手どりにして
 やりたい」とおもひます」といひ
 ました。

父 狐 尾 口

第九課

あるひ、猫が、もりのなかにて
狐にあひ、ていぬいにあいさつ
しました。

狐は、耳

を立て、

尾をふり

ながら、「たまへ

には、何ぞ、げいがあるか」と



たづねました。

猫は、「イエ、あたへは、何もでき
ませぬ」とこたへますと、狐は
あらうて、「オ、げいな、よ、犬が
きたらば、どうするぞ」とある口
をいひました。

うのとき、ちやうど、かり犬が來た
ゆゑ、猫は、いろいろ、木に上り、

ました。狐はあちこちとにげて
見たれど、つひに犬にとられ
ました。

猫 耳 何 來

第十課

花は、はたきにて、しやうじを
はらうてゐました。子猫は、かけ
來り、耳を立て、目をまろく、

して、ぬらうてゐます。そして花
が、はたきをうごかすたびに、
とびつきます。
ねやねこは、
ふとんの上
に居ながら、
「ねまへは、何
をするのだ。」



れ花 さまの、れじやまになるぞ。うちらのまりをころがしてあつべ。

子猫よ、早くれや猫のいふこととをきけ。きかぬと、はたきでたゝかるゝぞ。

花 目 居 早

第十一課

ひさしぶりにあめがやみ、あさ日
がさして、木の枝には、つゆが
びかく、ひかりて 居ます。アレ
あることに、にじがでました。早く
みな 目をさまし、れきて 来て
とらんをされ。
くさは、めを だし、色々の花
がうつくゝく さきかけました。

小どりは、又うれし
さうにさへつり
ながら、枝のあひだ
をとびまはりて居
ます。

二郎も三郎も
みな來まいたか。
これから、つみくさ



にゆきませう。

日 枝 色 又

第十二課

ある日、太郎は、をぢよりふに
をもらひ、二郎は、又たいこを
もらひました。

今 太郎も二郎も、兵たいの
ぼうしをかぶりて居ます。 太郎

のばうーは、あか色で、二郎の
 は、あを で
 あります。此
 ふたりのばうー
 ーは、母が、
 紙にて、こー
 らへたので
 あります。二郎は、木の枝



にて、たいこのばちを作り、
 ました。ろして、太郎がふねを
 吹きますと、二郎は、たいこを
 打ちて、兵たいあろびをいた
 ます。

母 紙 作 打

第十三課

かみのばうーに、紙のはた、

竹にて作りしけんを持ち、
 めれころ日本の大いやうと、
 太郎は、いくさにすゝみ行く。
 れくのひとまに、れよせて、
 「すゝめやすゝめ、ものどもよ。
 てきのおんやに、せめいりて、
 手あたりしだい、うちとれ」と、
 大ねんあけて、叫びつゝ、

むしや 人形の 大いやうを
 あひてに、たゝかひ居たりし、
 つひにとりこに、したりけり。

竹 行 叫 人形

第十四課

二郎は、むぶんにて作りたる舟
 を持ち、れ竹は、母よりもらう、
 たる人形を持ちて、池へ

あろびに行きまゐつた。その舟は、ほかけ舟にて、日のまるのはたが立て、あります。ふたりは、人形をのせて、舟を池にかべまゐつた。



しばらくする

と、舟は、岩にあたりて、かかに水がはひりまゐつた。アア、人形が、つむよ、二郎さん、人形が、つむよと、お竹は、叫びまゐつた。そこで、二郎は、すぐにほうにて、舟をかきよせ、人形をあげてやりまゐつた。

舟池岩水

第十五課

二郎さん、ごらんなされ、此池に、
 たくさん、うをが、あます。お竹
 さん、私が、つりて、見ませう。
 つること、は、れよくなされ。こゝの
 うを、は、よくなれて、あて、舟を
 こいても、又、手を、水に、入れ、

ても、にげませぬ。
 アレ、今、れほき
 なの、が、ういて
 来て、手をつ、き
 ます。大かたゑと
 思ふ、ので、ござり
 ませう。
 お竹さん、私も、手



を入れて見ませう。お、今の
大きなのは、あの岩の下
おかくれまゝだ。うをや、つり
はせぬぞ、早く出て手を
つけ。

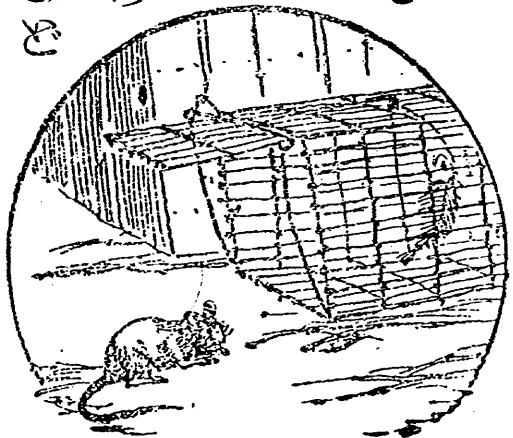
私 入 思 出

第十六課

子ねずみ、母のもとに来て、「今

私は、よいところを見つけ
ました。」

「其入口は、ちやうど
よい大ききで、猫
にははひれませぬ。
又其中には、もち
やうをのほねなど
がありて、よいにほひ
ます。」



「私は、すぐおひらうと思ひました
 が、母さまに、知らせにまゐり
 ました。早く、あそこへ行きて
 住みませう。」
 ねずみの母も、「お、それは、おな
 といふもので、一とおひると
 出ることのできぬものだ。
 れまへは、よくきくに來た。知

らぬことをきかずにすると、
 とんだ目にあひますぞ。」

其 中 知 住

第十七課

ありは、地に穴をほりて、其中
 に住みます。
 ある日、穴の中が、きふに
 くらくなりた故、ありが出て

見ると、いも虫がねてゐました。
ありは、いも虫に、

「ご、は、入口で
どざります、どうぶ
のいて下され」と
たのみまゐたが
き、ませぬ。ありは、
はらを立て、うれなら、からだを



くひやぶりにて、穴をあけて、とほる
がよいか」といひまゐた。
いも虫は、このありが、小さい
くせに、何をいふかと、知らぬ
ふりをしてゐました。
ところで、二三びきのありが、はら
にくひ付きたれば、いも虫は、
れどろいて、ころげまはりたれど、

ありははかさず、つひにはらを
くひやぶりまゐた。

地 穴 故 虫 付

第十八課

こゝに、二郎と三郎とがかき
を取りて居ます。二郎は柿
の木の上から、三郎は柿
をうけてとらん。

三郎は受けますから一二三
と かきつて、三つめに おかげ
なされ。

二郎は
一二三
とよび



ながら、柿をなげられた、地
におちて、つぶれて、ままひまゐた。

それと、虫の付いた柿て
ありました。

「あにさん、こんどは、ぼろーの中
へ受けませう」というて、三郎
は、其ぼろーを、たかく上げ
ました。

それから、少しも受けそこない
をせず、多くの柿を取り、

ました故、二人は、よろこんで、
其柿をうちへ持ちかへり、
父母にわけてあげました。

取柿受 少 多

第十九課

口は一つよ、耳二つ。
されをいふこと 少くて、
多くきくところ よかりけれ。

口は一つふ、目は二つ。
 されを多くを見て知りて、
 えきなきをかきせぬぞよき。
 口は一つふ、手は二つ。
 されをのみくふことよりも、
 二をいはたらけ、二をいはたらけ。
 こゝに、ちんとなこととがゐます。

第二十課

猫は、くろ白赤
 の、三色の毛
 ある故に、みけ
 と いひます。
 ちんは、白い毛
 と、くろい毛と、
 まじりて 居ます から、おち
 いひます。



此 おちは、外の猫を見ると
れひます。が、みけとは、中よく
あろびます。

おち と みけ とは、小さいとき
より、一よにうだち一故、少一
もけんくわをいたしませぬ。ひる
は、一つさらでたべ、よるは、
れなじはこの内にねます。

おちは、ぎうにくをなげてやれぬ、
あと足で立ちて受け取ります。
又、まへに、ぎうにくをねいて
も、おあづけといへぬ、たべませぬ。
みけは、うをにゐても、おとなしく
見てゐます。

白 赤 毛 外 内

第二十一課

こゝに、二人のきやうだい
が居ます。

あねの年は、十二で、いもとの
年は、七つであります。

母は、今外へゆきて、二人は、
内に入るすをしてゐます。

あねは、毛糸で、あみ物をして
居ますと、いもとは、赤い紙を

持ち来て、姉
さん、これに穴
をあけて、くだ
され、ぬひとり
しますから」と
いひました。
姉は、穴をあけて
やりますと、妹



は、白い糸をとほして、しまひ、
「姉さん、このやうな物ができ
ました、何ぞありませんか。」

姉は、「よくできました。うれは、うめ
の花であります。母さま
がおかへりなされたら、お目に
かけるがよい」といひました。

年 糸 物 姉 妹

第二十二課

今は、年のはじめにて、がくかう
も休みであります。きやうだい
は、うどに出て、色々の物を
もちて、あそんでゐます。
をどこの子は、たこをあげ、女
の子は、まりをついてゐます。
妹は、毬が池の中へれたちた

とて、泣きたり、
たれを、兄は、
すぐに取りて
やりまゝた。

兄は、たこをあげて
居ますと、かぜが
つよくなりて、糸
がきれさうになりまゝたから、



いそいでたこをれろゝまゝた。
兄は、糸をまかうとゝまゝたが、
もつれてまけませぬ故、姉と妹
にてづたうて もらひ、やうく
ときまゝた。
きやうだいは、此やうにむつまゝく
して、助けあはねを なりませぬ。

休 毬 泣 兄 助

第二十三課

ある休日、二郎は兄の太郎と、とむ毬を投げて、あうんで居ました。太郎は、手にて受け、二郎は、ぱうーにて受けておりました。

今、太郎が投げた毬を二郎は受けやうとして、ひどくかほに

あてられまゐりました。二郎は、むうーを投げた、一、両手でかほをおさへました。あなたは、二郎が泣いたと思ひますか。



太郎は、直にかけて来て、二郎を助け、さまぐに、なぐさめまうた。二郎は、なみたを、だゝながら、「兄さん、うんなに、いたくは有りませぬよ。此位のことでは泣きませぬ」といひまうた。

投 兩 直 有 位

第二十四課

お竹は、とくれやのいひつけをまもりて、ままとよよき子で有りませ。

ある日、お竹は、母とり、うつくりき人形を、ほうびふもらひまうた。此、人形のほゝは、さくら色まで、口は、小さく、まことにかはゆらうござります。

お竹は、此位よき物は、外よ
かいと思ひました。

そして其名

をうめとつけ、

両手でだき、

かゝつて、まことの

妹のやうに、だいじよします。

お竹は、よる眠る時よは、人形



を、おぶんにならべてぬさせます。
そして朝起きると、直よ人形
をも起します。

名 眠 時 朝 起

第二十五課

ぬむれ 眠れ、人形 とぬむれ。

泣くな泣くな、泣かずに眠れ。

すゝきこかげに、とりたるとまの

上にて志づかに目をとおふさぎ、
眠れぬむれ、人形よぬむれ。

起きよ起きよ、人形と起きよ。

朝ぬをするを、とく起き出でよ。

今こそまゝ、たく時とはなりぬれ。

まゝ、たく手つだひするこそよけれ。

おきよ起きよ、人形と起きよ。

あゆめ あゆめ、人形とあゆめ。

朝日のひかりよさきだち出で、

いざわれもろとも小やまふ上れ。

いざわれもろとも小やまを下れ。

あゆめ あゆめ、人形とあゆめ。

第二十六課

むかひ、おととばとが有りました。

おととは山へくさかりに、ばと

は、川へせんたくに行きました。
 川上から、大きな桃が一つ、
 かがれて来ました。それを取りて
 見ますと、大さううまさうか桃
 でありました。故、おとふたり
 で、たべやうとて、家に持ち
 かへりました。
 おとが、山からかへりますと、ば

は、直に桃を出しました。そして
 ふたりがたべやう
 と思つて居ると、
 桃は、二つに
 われて、中から、
 かはゆらいいをとこ
 の子がうまれ
 ました。



二人は喜んで、其子を取りあげ、
ゆをつかはせますと、其子は、
たらひをたかくさしあげて、投げ、
出した力に、二人はおどろき、
まゐりました。

此子は、桃の中からうまれた
故に、桃太郎と名を付けました。

山 川 桃 家 喜

第二十七課

桃太郎は、たんく、大きくなりて、
まことにつよくありました。ある
日、お、は、ま、向うて、私は、
鬼がしまへ、たから物を取りふ
行きたい」といひました。

二人は喜んで、朝早く起き、べん、
たうに、きびだんごをこゝらへて、

やりまゐた。

桃太郎 は、其

だんをこゝに

つけて、家を出

立、山をこゝ

てゆきまゐた。

少ゝ行くと、川

のむかふから、犬が来て、「あなた



は、どこへお出なされますか。又
おこゝに付けたのは、何で
とざります。

「われは、鬼がゝまへ行くので
こゝに付けた物は、日本一の
きびだんだだ。」

「一つ下され、お供いたませう。」

桃太郎は、だんをやり、犬を

供につれまゐつた。次に猿が
まゐり、其次に雉が来て、犬
とおなじやうに、供をぬがひ、
だんごをもらひまゐつた。

鬼 供 次 猿 雉

第二十八課

桃太郎は、犬猿雉を供まつれ、
鬼がしまへあたりて見ると、鬼

は、門を閉ぢて入れませぬ。それ
故、雉は一むんさきに、門の
やねをどびこえ、次に猿は、
へいをのりこえて、内から門
を開きまゐつた。

そこで、桃太郎は、犬と一よ
に、門の内におゝ入り、多く
の鬼とたゝかひ、つひにおく

までせめこみまゐつた。其時、大
 一やうのあかん
 とうじは、太い
 てつのはうを
 持ちちて、桃太郎
 ち打ちてかゝる
 と、桃太郎は、
 受けながして、



くみうちをはじめ、つひもあかん
 とうじをしばりあげてしまひまゐつた。
 鬼どもはおそれて、かうさんを
 ぬがひ、かくれみの、かくれがさ、打
 出の小づち、さんごじゆなどの、
 たから物を出しまゐつた。桃太郎
 は、それを車につませ、これは、
 たれの手車、桃太郎どのの手

車』とはやさせながら、おぼはへ
への、みやげに持ちてかへり、犬
猿 雉にも、分けてやりました。

門 閉 開 車 分

第二十九課

ある朝、二郎が起きて見ると、
大さうな雪で有りました。此
雪は、さく夜より降りつゝいた

故、みちも分らば、車もとほらぬ
ほどにつもりました。

よか、二郎は
いさみたちて、
早くがくかう
へ行かうとて、
力三をさせひ
ました。



そしてふたりして、ある家の門のまへ迄行きますと、きめうなものが立ちあてゐました。

それは、人によくふて、せい高く、色は白く、目と口とは、くろく、て、開いたぎり、閉ぢませぬ。

からだは大きけれど、手も足もなく、雪がふればふとり、日が

てればやせます。

此ふたりの見た物は、何であります。

雪 夜 降 迄 高

第三十課

此人は、小野のたうふうで有り、ます。たうふうは、雨の降る中に立ちあて、かはづを見てゐます。

此かはづは、
 やなぎの枝
 にとび付かう
 として、たび
 たび おちた
 れど、たゆまは
 勉めて、つひ
 小とび
 付きまゝした。



たうふうは、これを見て、かんじんじ、

何とどにて、も、べんきやうすれば、
 出来るものだと思ひまゝした。
 それから、たうふうは、雪の朝
 にも、早く起き、雨の夜にも
 おろく迄、べんきやうして、字を
 習ひ、つひに、名高い手かきと
 なりまゝした。

小野 雨 勉 字 習

第三十一課

まかべ まかべ、勉めて まかべ、
 からへ 習へ、たゆまほ からへ。
 まかびのみちを、ぬえせずからへ、
 よむもかくも、教へのまゝに。
 よむ 文もかく 文字も、
 れもいろき うひまかひ。
 まかべ まかべ、勉めて まかべ。

此うたは、おもいろきうたあり。

其中よある「たえせほ 習へ」と
 は、たえ間 かくほねをりて 習へ、
 と云ふことふて、又「うひまかひ」
 とは、習ひ 初めと云ふこと
 あり。

教 文 間 云 初

第三十二課

一匹きの年より馬が野に
 おかして有ります。太郎は二郎
 力三と一もふ、此馬ふ
 乗りて、あそぼうと思ひました。
 二郎は馬に乗ることがすきで
 有りますから、力三もすゝめ
 ました。力三が云ひまは、馬
 ふ乗るおとは、習はずふはできぬ

ものだと、此問
 せんせいからき
 きました。も
 落さるゝといけ
 ませぬから、私
 は乗りませぬ。
 太郎は力三、
 あの馬のふふいおとは、私が



知りぬいて 居ます。決して 恐るゝ
るおとは 有りませぬ。初めての
人ふも 乗れませぬ。力さんが いや
から、二郎と 一よよ 乗らう
とみちばたの 石を ふみだいい
して、 乗りまゝた。

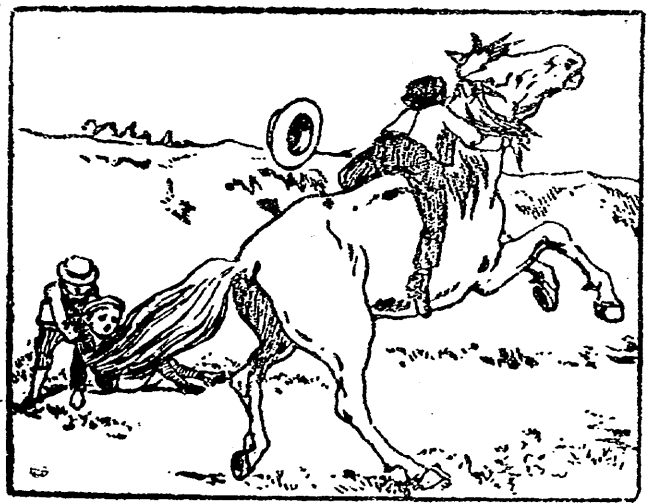
力三は、乗りたい けれど、せんせい
の 教を まもりて、 見て おまゝた。

馬 乗 落 決 恐

第三十三課

太郎 は、吾等 二人 は、 乗りたる
ぞ。 サア、 一かけ かけて 見よ」と
云うたれど、馬は、少ゝもうとき、
ませぬ。そこで、いきりよ つかを
引いたれど、馬は、だんく あと
へ 行きます。

「兄さん、決して恐るゝ子は およびませぬ」と云ひ
 かがら、二郎は、
 持ちちて 居たる
 ほうを ふりあげて、
 馬を 打ちました。
 馬は、きふよ
 かけ出し、せぬ、



まはりて、二人は、誠子 困りました。
 二郎は、せや、せぬ落され、太郎は、
 やうやく馬のくびよ、かへ付
 いて居りましたが、つひにどろの
 中へ落ちて、手も足もまくろ
 よ、かりました。
 力三は、直よ、かけ行き、二人を
 助け起して、やりました。

吾等 引 誠 困

第三十四課

吾等 が うまれた 日本は、誠 小
をいくにぞ、其人かば、三千
七百万 ほどで 有りませ。

みやま を 東京 と 云ひ、まゝ が
天子 さまのお住みかさるゝとまろ
みて、大きくみぎやか かるまとは、

日本 一で ありませ。

日本は、じこうもとく、

地 も さい故、

米 茶 ちが

よく でき、又

さいと も たく、

さん ち 取れませ。

日本は、むかりとり、かゝまい人、



1208

つよい人、其外名高い人が、
たくさんよありました。みなさん
もがくかうにて、色々のまを
習ひ、ちををみがき、からだを
つよくし、よき人よあらねをあり
ませぬ。

千百万東京天米茶 尋常小學讀本卷之一終

尋讀與付

明治二十年四月二十九日版權所有届

文部大臣官房圖書課藏版

此書籍ハ賣捌人ノ手ヲ離ル、トキ何等ノ名義ヲ附スルモ
定價ニ超過セル金額ヲ買手ヨリ拂ハシムルコトヲ許サズ
定價 卷一 卷二 各金六錢五厘 卷
三 卷四 各金七錢五厘 卷
五 卷六 卷七 各金八錢五厘

明治二十七年十二月十四日 翻刻許可
明治二十七年十二月廿八日 印刷
明治二十七年十二月卅一日 發行



發行兼 印刷者 大日本圖書株式會社
東京市京橋區銀座二丁目廿二番地

右代表者 專務取締役 佐久間 貞一

發賣所 東京市京橋區銀座 大日本圖書株式會社 同支社
一丁目二十二番地 大坂市東區博愛町 四丁目十七番屋敷

